

透析医のひとりごと

「超高齢社会における地域の透析医療事情」 今野 敦

〈施設間連携の重要性〉

当地（北海道北見市）の高齢化率は約 28% で、全国平均を上回り、医療環境的には「大量死」の状況に突入している。定員 100 名の特養の入所待機者が 300 名といった状況である。

透析患者の高齢化も深刻な問題で、虚弱高齢透析患者の増加、介護の担い手不足、冬場の交通手段確保の困難さも加わり、自立した生活ができない高齢透析患者が急増している。当地の最大の基幹病院は維持透析治療を受け入れておらず、終末期の入院透析は透析病院や有床診療所で担っている。そこでは急性期医療だけではなく、リハビリテーションや介護サービスも必要となっている。透析医療機関間や介護施設との密な連携が必要とされている。しかしながら、介護の現場ではまだまだ透析治療についての理解も進んでおらず、透析患者は受け入れ困難として断られることも少なくない状況がある。

当院の近隣に、透析患者の受け入れも目的の一つに開設した定員 29 名の小規模特養があり、入所者の半数を透析患者が占めている。その実情は、入所した透析患者が重症である事が多く、一般の入所者に比べて、その入所期間は極端に短い。終末期透析患者の介護の現場は想像以上に厳しい。医療と介護の密接な連携が求められている。

〈高齢透析患者の生命・生活の質〉

透析医療も確実に進歩しており、命を繋ぐ医療から生命・生活の質の向上を目指す医療へと変化してきた。各種のガイドラインが作成され、標準治療も定着しつつあるように思える。しかしながら、こと高齢の終末期透析患者に関しては、透析医としての無力さを日々痛感させられている。

すでに高齢となつてからの透析導入、糖尿病を基盤とした腎不全など、動脈硬化が進展した状態での透析導入となると、透析治療という身体にとって異常事態に十分対応のできない例が少なからず見られ、導入後間もなく残念な結果に至る事も少なくない。また、透析を続けてきた患者が、後期高齢者ともなると、脳梗塞や骨関節障害、認知症や精神障害のため、自立した生活を送れなくなる患者も増えてくる。認知症を抱える透析患者は、透析治療自体の困難さもさることながら、自宅での食事管理や服薬管理にも大きな支障となる。そして認知症が進むにつれて家族での介護が困難となり、施設入所に至る事となる。そのような状況で入所した高齢透析患者は、いかに関わろうとも急速に活動性が低下し、寝たきりとなる事が多い。このような状況を打開する方策をなかなか見つけられないでいる。

高齢透析患者は時間的な制約もあり、通所系のリハビリテーションも利用しづらいが、身体・精神機能低下を来さないためにも積極的な利用が望まれる。その目的達成のために、介護の現場にも透析患者についての理解を深めてもらう事が重要と考え、そのための研修会を企画している。

〈医療・医療と医療・介護の連携のために〉

透析患者は様々な疾患を合併する。特に高齢透析患者では多くの診療科の治療を要する事が多い。当院のような単科の透析施設はその対応に苦慮することが少なくない。ブラッドアクセスについては市内の他の医療機関に全面的に依存しているし、脳血管疾患、狭心症・心筋梗塞、閉塞性動脈硬化症、消化管出血、虚血性腸炎、各種の癌などの診療についても他の医療機関にお願いするしかない状況である。

いつも心苦しく思うのは、診療情報を十分な形で伝えられない事である。当院では独自のA4版のデータシートを作成して添付しているが、情報が見づらいのではないかと気にしている。一方、透析患者のデータは、様々な身体状況を適切に管理するためにも詳細である事が求められる。さらに、介護の現場とも詳細な身体状況の共有が必要で、個々に応じた適切な血圧値や、注意すべき症状等共有すべき情報も多い。

国の施策である地域包括ケアの実現や医療と介護のチームケアの実現のためには、医療機関間、さらに医療機関と介護施設間のスムーズな情報連携が必須となると思われる。当地では医療と介護の情報連携を目指して、「北まるネット」を立ち上げている。

透析医療も介護との連携が重要な時代になっており、その方策を日々模索している。

北見循環器クリニック（北海道）